

イノベーションによる貢献

（はじめに）

世界的に著名な経営学者・ピーター・ドラッカー氏は、「組織は個々人の貢献を通して人を幸せにできなければその存在意義はない」と 述べています。我々体操関係者は、ロンドンオリンピックで何を、そしてこれから未来に向けて何を、貢献し人々を幸せにしていくのでしょうか。

（ロンドンオリンピック）

ロンドンオリンピックの成績は、男子体操が団体で銀メダル、個人総合で内村航平選手が金メダル、田中和仁選手が6位入賞、種目別・「ゆか」で内村航平選手が銀メダル、「平行棒」で田中和仁選手が4位、田中佑典選手が8位に入賞しました。女子体操は団体で8位入賞、種目別・「段違い平行棒」で鶴見虹子選手が7位入賞しました。新体操はフェアリージャパンPOLAが団体で7位入賞しました。トランポリンは伊藤正樹選手が4位、上山容弘選手が5位入賞しました。メダルや入賞の獲得は多くの人々に感動や幸せを与えました。しかし、これらのメダルや賞状そのものよりも、それを獲得するための努力の過程が、現代社会で失われつつある大事なモノを見直す機会となり、多くの感動を人々に与えたことを私たちは知っています。

男子体操の団体戦で襲った悲劇。跳馬の怪我で途中退場となった山室選手は苦痛に耐えながら笑顔で会場を退場しました。そのシーンをテレビで見ていた一部の人々は「なぜ笑いながら」と疑問に思いましたが、後にわかった事実は「自分が悲愴な顔で退場したらチームに悪影響を及ぼす」と骨折という大怪我の激痛の中、無理につくった笑顔の真実、そしてチームメイトの皆がその笑顔の真意を汲み取り奮起したという事実は銀メダル以上に多くの人々に感動と真の友情の尊さをみせてくれました。

また、女子体操は北京に続く団体8位入賞、そして鶴見虹子選手の28年振り種目別入賞は、長い女子体操界の低迷期を終え、明るい未来に向かって輝く希望への道を指し示しました。

新体操はオリンピック直前に、それまで4年間チームの核として活動していた遠藤由華選手が大怪我を負い戦線離脱し危機を迎えましたが、チームはハンディに打ち勝ち見事入賞を果たしました。その影にチームメイトを思い合う深い絆があったことに多くの人々が感動をいたしました。

トランポリンは男子北京五輪代表の上山容弘選手と初出場の伊藤正樹選手の新旧のエースが参加し、メダルには一歩届かなかったものの堂々たる演技で4位、5位の両者入賞という過去最高の成績を修め、次回大会でのメダル獲得に大きな期待を感じさせました。

（ロンドンオリンピック帰国報告演技会）

そしてロンドンオリンピック開催の直前、体操、新体操、トランポリンの日本代表選手は東日本大震災被災地の「七ヶ浜小学校」を訪ねました。児童を前にオリンピックでの健闘を誓い、オリンピックの会場には児童が寄せ書きをした応援旗が選手たちを勇気づけ、選手たちはその寄せ書きに応えようと頑張りました。

ロンドンオリンピック終了後、選手たちは、新潟、大阪、広島、福岡、と「ロンドンオリンピック帰国報告演技会（東日本大震災支援チャリティイベント）」を行い、そして最後にロンドンオリンピック直前に訪ねた「七ヶ浜小学校」を訪れ、オリンピックに持っていった児童の寄せ書きの入った日の丸を御礼とともに児童たちの手に返し、仙台市での最後の演技会で、多くの被災された方々とともに代表選手たちのロンドンオリンピックは閉幕したのです。

このように「体操ニッポン」は、これまでのオリンピックでメダルを獲得するという、単に物質的な目標から、イノベーションにより社会に貢献をする段階に成長してきているのだと存じます。日本代表選手たちは、帰国報告演技会を開催する中で、何に貢献したいかとただ漠然と思うのでもなく、また何に貢献せよといわれ

たからやるのではなく、自分で真剣に考え抜いて、それぞれの場で自分が何に貢献すべきかを見つけ出しました。我々全国の体操関係者も「体操ニッポン」の一員として、日本代表選手負けないう、それぞれの立場で「体操ニッポン」に何を貢献できるのか、「体操ニッポン」に対して、自分の強みを投入する貢献を見出そうではありませんか。

(リオ・デ・ジャネイロオリンピック)

2016年リオ・デ・ジャネイロへの道が始まりました。「これまでの延長線上に未来はない」との言葉のとおり、変化の時代においては、これまでと同じことを同じようにやっていたのでは未来は創れません。イノベーションが必要です。イノベーションの戦略の一步は、古いもの、陳腐化したものを計画的かつ体系的に捨てることです。イノベーションを行う組織は、昨日を守るために時間と資源は使いません。これまでの栄光、ロンドンでの好成績を捨ててこそ、新しい目標を達成できるのです。

目標は4年後のリオオリンピックですが、毎年の目標は必ず達成しなければなりません。毎年の目標は明確に、やさしすぎず、そうかといってイチかバチかでもなく、少々背伸びをしたもので達成可能なものをつきながら、毎年の目標を確実に達成しながら、4年後の高く難しい目標を達成していかなければならないのです。また、「ロンドンオリンピック大反省会」では全国の体操関係者の皆様から、たいへん多くのご意見を賜りました。これらのご意見、ご指導を真摯に受け止め、強い「体操ニッポン」を創造しなければなりません。

男子体操においては、2004年アテネオリンピックで団体・金メダルを獲得した以降、8年間にわたり団体王者の座を中国に譲っています。また、スペシャリストの養成については明らかに中国をはじめ他諸国に遅れをとっています。団体優勝のためにもスペシャリスト養成が急務です。日本の指導者たちは優秀で研究熱心であると世界の体操界からも評価を受けています。大反省会での全国体操関係者からの貴重なご意見を真摯に受け止め、指導者たちの英知を結集し、リオオリンピックでは団体・金メダル奪還、個人総合・金メダル、種目別・複数メダルを獲得し雪辱を果たしたいと存じます。

「2013年世界体操アントワープ大会」では、個人総合・金メダル、そして課題の種目別での複数メダル獲得を目標とします。

女子体操においては、北京、ロンドンオリンピックと常時入賞国としての定位置を確保しつつあります。リオオリンピックでは団体での銅メダル獲得を目標とします。そのためには、他の強国と点差をつけられている「跳馬」と「ゆか」の強化を徹底的に行う必要があります。男子ジュニアがゆか・跳馬の強化に成功した事例を女子にも導入し、強化の実績を上げていきます。また、採点規則の変更により「芸術性」が求められる点についても専任コレオグラファを起用し、他国に遅れをとらないように強化して参ります。

「2013年世界体操アントワープ大会」では、個人総合、種目別入賞を目標とします。

新体操においては、ロンドンオリンピックでは団体が12年ぶりに入賞を果たしました。強化拠点をロシアに移したことにより、国内基準の強化から世界基準の強化にシフトした成果でした。リオオリンピックでは団体はメダル獲得、個人は決勝進出を目標とします。現在、強化拠点を団体はロシアにしているのに加え、個人も3月よりロシアに強化拠点を変更し、グローバル基準での強化を始めました。

「2013年世界新体操キエフ大会」では、団体8位入賞、個人15位以内を目標とします。

トランポリンにおいては、世界トップの中国とは順位的には僅差であるものの質・内容的には大きな差を開けられています。トランポリンは「跳躍力」、「空中姿勢」、「スピード」の三要素から内容が評価されますが、残念ながらその三つとも中国との差は大きいと言わざるを得ません。本年度より日本体操協会の正式種目となったトランポリンは他種目とのシナジー効果を得て、中国に負けないうに高難度の技を正確に実施するために、基礎技術の徹底強化と体力向上をはかります。リオオリンピックでは男子は金メダル、女子は5位入賞を目標とします。

「2013年世界トランポリン・ソフィア大会」では、男子は個人、シンクロ、団体の全てにおいて3位入賞のメダル獲得を目標とします。

強い「体操ニッポン」を創るのは、他の誰でもありません。選手、コーチ、そして私たち体操関係者です。全国の体操関係者が一丸となり、体操人同士がともに相手のことを尊重し合い切磋琢磨し合う、そういった土壌の醸成が必要で、そういった土壌で生まれたメダルこそ、真の価値があり強い「体操ニッポン」の証となるのです。

（一般体操）

少子高齢化社会が進んでいく日本において一般体操が社会で果たす役割は決して小さくなく、一般体操は広く国民の皆様にご体操に興味を持っていただき、体操を通じて心身ともに健康を維持できるような社会を創出し貢献していかなければなりません。各地域の皆様方には一般体操組織化に対し多大なるご尽力を賜り順調に組織化が進んでおります。各地域での一般体操の組織化、一般体操指導者の育成、そして「地域体操祭」の開催は必ずや地域の体操界発展に寄与いたします。

また、毎年開催をしております「日本体操祭」は昨年より「スペシャル・イベント」を追加致しました。従来の「参加者が楽しむ場」から「交流の場へ」そして魅力ある「観に来て感動できる日本体操祭」へとイノベーションに取り組みました。体操、新体操、トランポリン、男子新体操、スポーツアクロ、エアロビク、と体操の魅力は際限なく広がります。我々は常にイノベーションを行い、一人でも多くの方に「体操ニッポン」の一員になっていただけるよう一般体操を通じて体操の魅力を発信し底辺を広げてまいります。

（男子新体操の普及）

男子新体操はメディアで取り上げられる機会も多くなり、国民の皆様から注目をされるスポーツへととなりつつあります。しかし、まだ底辺が拡大しているという状況には無く、特殊なスポーツとして扱われております。昨年より男子新体操を今後さらに発展させるための一つの手法として、男子新体操とスポーツアクロとの融合を試みております。勇気をもってイノベーションに取り組むことで、これまで男子新体操界が努力してきた道をさらに大きな未来に向けての道に変えていかなければならないと思っています。

（地域活性化）

昨年の政策方針で、「体操の発展の可能性」について、一つの方程式を提示しました。「体操の発展の可能性」は「国民の関心」×「チャンピオン」×「地域での普及活動」で算出されるということです。一つの項目でもゼロがあれば、「体操の発展の可能性」はゼロとなってしまいます。

「国民の関心」は主に日本体操協会が日本代表選手の活躍や大会開催などで、メディアを活用し広く国民の皆様にご体操に興味を持っていただけるようマーケティングを行います。昨年はロンドンオリンピック前後に、選手の活躍をメディアで大きく取り上げていただきました。秋には、「全日本体操団体・種目別選手権」を初めてテレビ放映することに成功し平均6%、最高で10%を超える高視聴率を獲得できました。本年は、6月の「全日本種目別選手権」を新たにテレビ放送することに成功しました。1年間で世界体操を含め6大会をテレビ放送するというイノベーションにより、国民の皆様にご体操を認知していただく絶好の機会を創造できましたことは体操の普及啓蒙に大きく貢献できることと存じます。

「チャンピオン」は日本代表選手たちの成績を意味し、ロンドンオリンピックでの日本代表選手たちは、その役割を十分に果たしました。

そして「地域での普及活動」については、日本体操協会と地域協会が協力し合い、少しでも地域での底辺拡大を図る努力を行わなければなりません。本年2月の「全国代表者連絡会議」で発表されました三重県の相好体操クラブのイノベーションなど、全国にはまだまだ多くの成功事例があります。これらの体操普及発展の成功事例を全国の体操関係者が共有化し、全国に水平展開することで、「体操の発展の可能性」が高くなっていくのだと存じております。

また、国民体育大会における体操競技・団体競技方式は日本体操協会が日本体育協会と調整を行い、平成26年度の長崎国体より、これまでの「4-4-3制」から「5-5-4制」へと変更することができました。

このことにより国民体育大会における体操競技の位置づけが大きく向上することとなります。国民体育大会を活用し、地域の競技力向上に役立てていただきたいと存じます。

また、各都道府県協会・連盟ご推薦の役員を本協会負担にてビジネススクールに派遣し、地域や日本の体操界の将来を担う人材の育成事業、また公認指導者の育成にも引き続き力を入れて参ります。

日本体操協会と地域が一体となって「体操ニッポン」を支え合う、そんな体操界を創造して参りたいと存じます。

(東日本大震災復興支援)

東日本大震災発生後、「体操ニッポン」は各大会で義援金の募金活動、被災地に出向いての体操指導、模範演技会実施、ロンドンオリンピック代表選手によるオリンピック直前被災地訪問、オリンピック報告演技会など、さまざまな支援活動を行って参りました。

日本体操界は、今後も引き続き東北地方の復興支援に力を注いでいかなければならないと考えています。金メダリスト内村航平選手をはじめとする「体操ニッポン」の選手たちは、一日も早い東北地方復興を願い、体操を通じて被災地の子どもたちに元気、勇気、笑顔を与えることが自分たちのできる貢献と信じて活動をしてきています。

体操関係者がやるべき支援はたくさんあると思います。選手たちが被災地を訪問し、現地の子供たちに元気、勇気、笑顔を届けましたが、それ以上に現地を訪問することで内村選手をはじめとする日本代表選手たちは人間的にも成長し、練習している時も被災者、被災地のことは忘れたことがないとのコメントを残してくれるようになりました。体操関係者の一人でも多くの方がこれからも物心両面にわたり、被災地にできるだけの支援を行っていくことこそ、「体操ニッポン」のイノベーションによる貢献だと存じます。

(パワハラ、セクハラ撲滅運動)

柔道の暴力指導が明るみになった際に、日本体操協会は他競技団体に先立ち、直ちに「パワハラ、セクハラ撲滅運動」を旗揚げしました。それほどに、この問題は体操の存亡に関わる問題だと判断をしたのです。国際体操連盟もこれに協調し、今後「パワハラ、セクハラ撲滅キャンペーン」を実施することとなりました。我々はこの機会にこれまで表面化しなかった問題をディスクローズし、しっかり受け止め解決していかなければなりません。勇気が必要です。

指導にもイノベーションが必要です。練習の価値が指導者の満足となった時、パワハラやセクハラ発生の要因のひとつとなります。練習の価値はどこにあるのか、新しい価値を求めする必要があります。練習の価値は選手の実力向上にあります。それに加え、新しい価値として「社会への貢献」と進化することができるようになった時、自然にパワハラやセクハラは撲滅していくのではないのでしょうか。

撲滅運動は一過性のものであってはなりません。指導者のイノベーションによって撲滅することで実現できる可能性が高いと考えています。

(むすび)

イノベーションによる貢献。それは私たちが新しい価値観をもって積極的に変化に挑戦することで具現化できることです。我々は「体操ニッポンの誇り」を持ちたいと思っています。「誇り」を持つためには、常に「体操ニッポンのあるべき姿」を求め、社会に貢献し続けなければなりません。そういった意識があれば、大会での成績も自ずと向上し、パワハラ・セクハラ問題も撲滅し、体操の普及発展も続いていくのだと存じます。そういった意気込みを込め、今年のスローガンを「イノベーションによる貢献」と致したいと存じます。以上、平成 25 年度(財)日本体操協会政策方針を発表いたしました。皆さん、一緒に頑張りましょう。